FACE TO FENCE

●提案

大学キャンパスを取り囲むフェンスの一部をリノベーションし、学生と近隣住民との触れ合いの場所をつくりだす。撤去されたフェンスは新たな空間の素材として再利用され、これまでの「拒絶」から「親しみ」へとその意味は反転する。人と人とのつながりを通して、未来へ受け継がれていくスペースを生み出す。

●背景

芝浦工業大学大宮キャンパスは、昭和41（１９６６）年芝浦工業大学の第２キャンパスとして開校した。当時この辺りは一面に田んぼや沼が広がっており、都心では考えられないようなゆったりとした時間が流れていた。開校当初は、誰もが自由に構内に出入りすることができ、夕涼みをともにする学生と近隣住民の姿がよく見られた。

月日の移り変わりとともに、キャンパス周辺は宅地造成され、多くの住宅が建設された。大学側はセキュリティへの懸念から敷地境界線をなぞるようにフェンスを設け、学生と近隣住民の生活の場は分断されることになった。

現在、構内における両者の触れ合いを目にする機会は滅多にない。日常生活において互いに干渉することもなく、すぐそばに暮らしながら遠い存在となってしまっている。

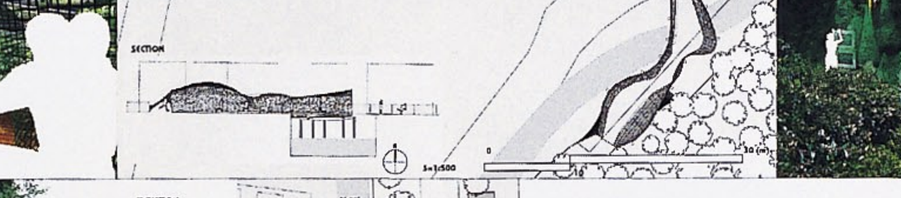
●子どもスペース

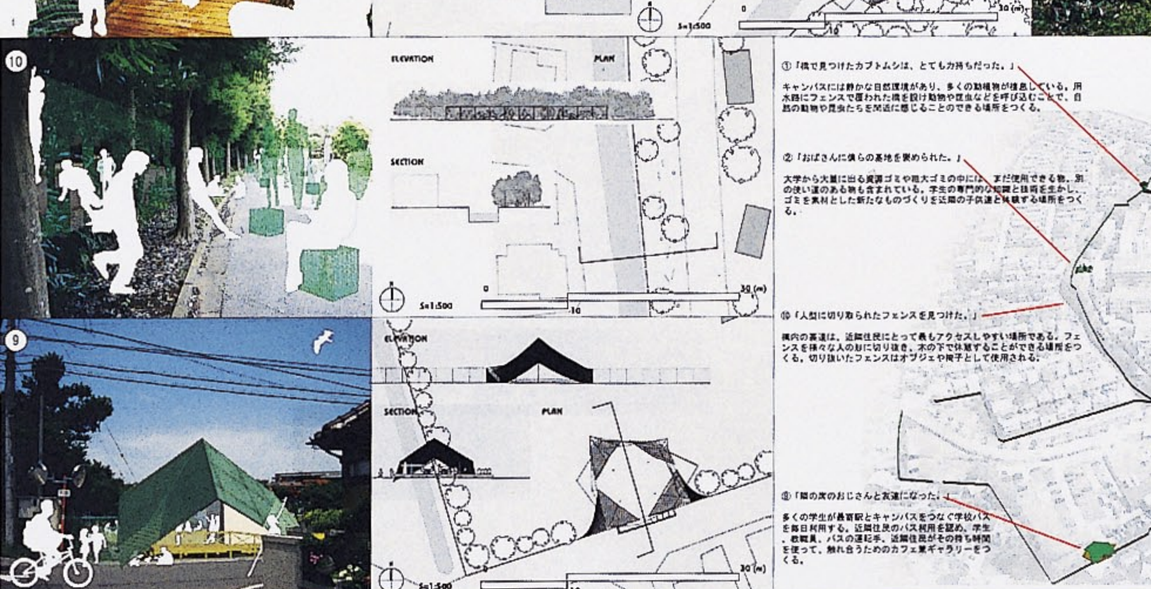
子どもはどこでも自分たちのスペースをつくり出すことができる。それは公園の砂場のときもあるし、傘で囲まれた空間のときもある。遊びの天才である彼らはどんな場所でも最高に楽しい空間を見つけ、演出し、そこで遊びながら成長していく。キャンパスのフェンスもまた、子どもスペースをつくり出す恰好の材料となる。

キャンパスにはいろいろな性格を持つ場所が多くあり、子どもはフェンスを使って変化あるスペースをつくり出すことができる。また学生や教授と子どもとの出会いは彼らを子どもに戻す。その結果キャンパスには内側からも外側からもたくさんの子どもスペースが誕生し、ついにはキャンパス全体が子どもスペースに変容する。

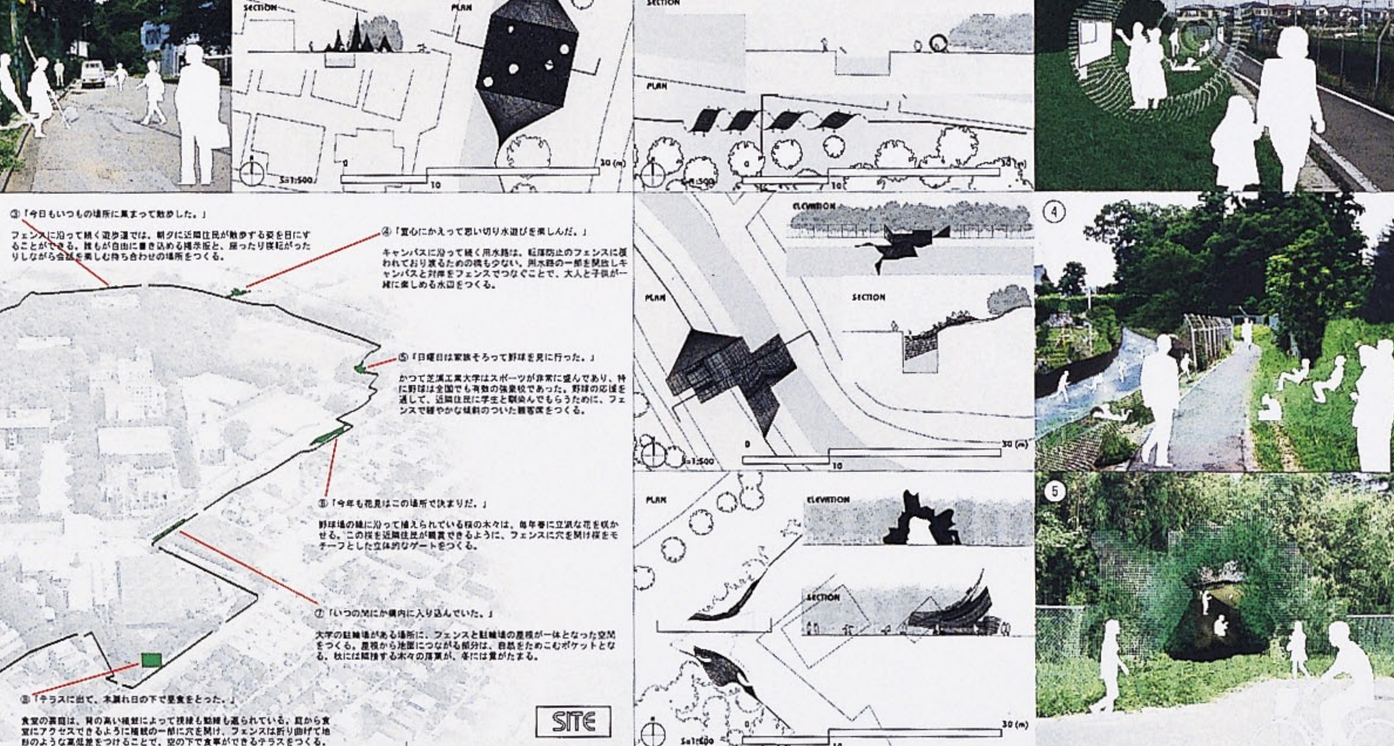
LOCATION

芝浦工業大学　大宮キャンパス
（埼玉県さいたま市見沼区）





DIAGRAM



STRUCTURE

DETAIL